

書評

末木文美士著

## 『明治思想家論 近代日本の思想・再考Ⅰ』

トランスビュー 二〇〇四年六月二〇日 四六版 三三〇頁 二八〇〇円＋税

## 『近代日本と仏教 近代日本の思想・再考Ⅱ』

トランスビュー 二〇〇四年六月二〇日 四六版 三八二頁 三二〇〇円＋税

三宅守常

東大寺の歴史はよく知っていても東大寺が浄土宗所属であつたことを知る仏教学者は少ない。唐招提寺・薬師寺・法隆寺の歴史はよく知っていても真言宗所属であつたことを知る仏教学者は少ない。ことほど左様に、明治初年の制度史は知る人少なくまたややこしい。だから関心も湧かないのだろう。仏教思想史の面でも事情はたいして変わらなない。それでも、ひと昔前に比べると関心度がやや高くなつたような感じがしないでもないが、やはり明治仏教の領域は研究者も少なく、仏教関係の学会では肩身が狭い。しかし近い将来、近代日本思想史との関連も含めて関心と呼ぶに

相違ないという一条の曙光にも似た期待感が湧いてきた。それは本書二冊を読んだ直後からである。理由は二つ、一つは著者が東京大学大学院教授として仏教関係の学界をリードする中心人物でその影響力は大であること、もう一つは専門ではなく、あくまで見取り図的取り組みと自ら断っているものの、その内容は近代の思想を丸ごと呑み込まんばかりの迫力があり、研究意欲を一層活性化させるきわめて刺激的な内容だからである。この魅力的な二冊はバラバラの内容ではなく一貫した流れがあり二冊でワンセットとなっている。ただし折に触れて書いたものの集成でも

あるため、重複繰り返しも無くはないが、『明治思想家論』を第一巻とし、『近代日本と仏教』を第二巻として、仏教という切り口から日本の近代思想をあらためて問い直そうという冒険的意識が基調となっている。したがって二冊併せて〈近代日本の思想・再考〉という総称を与えたいと著者自身明確に語るのである。では、斯様な意欲的な思想論評の根拠はどのような仕立て方になっているのだろうか。次に両書の目次構成を掲げる。

○『明治思想家論 近代日本の思想・再考Ⅰ』

- 序章 近代思想を見直す 明治の思想と仏教
  - 第一章 神仏習合から神仏補完へ 島地黙雷
  - 第二章 純正哲学と仏教 井上円了
  - 第三章 倫理化される宗教 井上哲次郎
  - 第四章 講壇仏教学の成立 村上専精
  - 第五章 内面への沈潜 清沢満之
  - 第六章 〈個〉の自立は可能か 高山樗牛
  - 第七章 体験と社会 鈴木大拙
  - 第八章 神を見る 綱島梁川
  - 第九章 国を動かす仏教 田中智学
  - 第十章 社会を動かす仏教 内山愚童・高木顕明
  - 第十一章 アジアは一つか? 岡倉天心
  - 第十二章 純粹経験からの出発 西田幾多郎
- 明治思想の可能性 むすびにかえて

年表 あとがき

○『近代日本と仏教 近代日本の思想・再考Ⅱ』

- I 近代思想と仏教
  - 1 日本の近代はなぜ仏教を必要としたか
  - 2 内への沈潜は他者へ向かうか  
— 明治後期仏教思想の提起する問題 —
  - 3 京都学派と仏教
  - 4 阿闍世コンプレックス論をめぐって
- II 解釈の地平
- 1 和辻哲郎の原始仏教論
- 2 丸山眞男の仏教論
- 3 『歎異抄』の現代
- III 仏教研究への批判的視座
  - 1 仏教史を超えて
  - 2 批判仏教の提起する問題
  - 3 日本における禅学の展開と展望
  - 4 アカデミズム仏教学の展開と問題点  
— 東京(帝国)大学の場合を中心に —
- IV アジアと関わる
  - 1 近代仏教とアジア — 最近の研究動向から —
  - 2 日中比較よりみた近代仏教
  - 3 日本侵略下の中国仏教  
一、日本侵略下の中国仏教

二、太虚の抗日活動とその思想  
三、抗日仏教の展開

— 楽観『奮迅集』を中心に —

- 4 大川周明と日本のアジア主義  
年表 初出一覧ならびにコメント あとがき

I

このように、一見ただけでも著者の博覧強記が充分に伺えると共に、興味をそそる章題ばかりである。最初に「序章」において、著者が再検討するそれぞれにとつての近代と格闘した各人物たちの、共に抱えたテーマとして〈宗教と世俗道徳〉（個と全体）という共通キーワードを提示し、これを基軸として以後の各章が展開される。

第一章は表向きは信教自由を楯に神道非宗教論を掲げ、裏では政治要路とつながって仏教を有利に導いたとされる維新时期仏教の定番、島地黙雷について語る。島地については近年神道界からの研究もかなり為されているが、神仏補完という表現からもわかるように、神仏いづれにも偏せず、あくまでも中立的に信教自由論と神道非宗教論を根拠とした補完システムを把握分析する。その中で注目してよいのは従来あまり使われない『報四叢談』付録の『三条弁疑』の引用である。これは島地の神道批判のなかでも特に秀逸

書評（三宅守常）

と思われるので、さすがと思わざるを得ない。そして島地の実現した方向性は民俗的雑多な要素の峻別無しに、結局は現在の政教関係裁判などにも引きずったままとなっている。明治初年の一見神道国教化のように見えてつ実のところ神仏どちらもあまり重用せず、専ら政治経済のみに突っ走ったツケでもある。為政者による教法政策の無策の責任は重い。

第二章は近代哲学を武器に知識としての仏教の世俗化に尽力した井上円了を論じ、啓蒙家としての哲学観・仏教観を見つつ仏教が国家に呑み込まれてゆく根拠を提示してしまつたと述べる一方で、スケールの大きさは見直す必要ありと評価する。もつともな見解であるが、その行動・事績を丹念に見れば円了における国家と個人、全体と個の位置関係、つまり円了の本質は何も護国愛理論を持ち出さなくとも、おのずから答えが出るだろう。

第三章は円了の師でもある井上哲次郎を論ずる。通常明治仏教史では哲次郎は登場しない。少々違和感を感じなくもないが、そこが近代思想、近代アカデミズムとの連関において展開しようとする本書の特徴、著者の意図を強く反映した箇所でもある。具体的には教育宗教衝突論争や現象即實在論などを通じてその哲学体系を論じ一定の評価を下しているが、明治以後の人文系学問領域の最大の大立者で、いわゆる首領<sup>ドク</sup>、単に帝国大学の人事にとどまらず、たとえ

ば江戸時代儒学の各学統派閥について現在でも幅を利かせ  
る思想枠組みを策定した功と罪などを考えると、徹底した  
井上哲次郎の評価研究が為される時期がそろそろやって来  
たように思う。

第四章は『仏教統一論』を駆使して仏教学者村上専精を  
仔細に論じる。これも書名から見ると、又いささか唐突感  
を禁じえないが、実はこれも本書の特徴の一つと言ってよ  
いもので、第二巻で論じる批判仏教の先駆的意味を持たせ  
た仏教研究におけるアカデミズムの苦闘というテーマで見  
るかぎり本書の基調である（近代明治の精神生活における  
知識と信仰の葛藤）例という位置づけができる。そして、  
この知識と信仰の問題は明治仏教ではお馴染みとなった次  
章の清沢満之論へと続く。清沢についてはかなり多くの研  
究があるが、それらを掌握した上で再評価する近年の動向  
を見据え、信仰を思索思弁できる宗教哲学のなかで個の絶  
対的価値にこだわり、絶対無限者の実在を論じた精神主義、  
内観主義へ沈潜してゆく宗教の本来的価値のありかを論ず  
るが、同時に、その徹底化は批判性の放棄、現実肯定へと  
流れてゆく必然的傾向を具有し、要は全体に呑み込まれる  
危険な落とし穴となってしまうという指摘も著者は忘れ  
ていない。

その、個を拡大して強力に主張した典型として第六章で  
は井上哲次郎の弟子筋にあたる高山樗牛を登場させる。著

者が語るごとく樗牛はかなり複雑な思想家である。近代日  
本における個人主義は個の超克が最大の課題であり、剛強  
な人格にあこがれる傾向があった樗牛の帰結としてニ  
チェ主義、英雄主義を標榜するが、それは超人の出現を渴  
望し個人を突破する絶対的真理を求める結末として国家へ  
の絶望感から真理のユートピアを日蓮主義のなかに夢見た  
からだと述べる。感傷的美文を世に送りつつ日本主義を唱  
え、日蓮のような超人に傾倒しつつデモクラシーの俗悪を  
否定する樗牛の生きた時代は、帝国憲法と教育勅語の発布、  
日清戦争から日英同盟へ至る国家体制確立期であった。し  
かし彼はこの国家建設の時代に影を見、当事者としての現  
代を批判したのである。それは偏狭な国粹主義ではなく西  
欧への精神的従属から脱却するための日本主義であったと  
も言える。全体と個人という一貫した著者のテーマは樗牛  
論においても明確に浮き彫りにされたのである。

さて浄土教、日蓮主義に続き、第七章においては鈴木大  
拙を取り上げてその心的変遷を明治二〇年代から第二次大  
戦まで追い、国家と個人のフレームで分析し両義性、二枚  
腰という表現をもって結論づける。大拙研究は数多くの蓄  
積があるが、本書のテーマから見たとき新たな地平を開く  
今後の展開を俟ちたい。

さらに、個の内面化の最後を飾る思想家として宗教的主  
観主義、見神体験で知られる綱島梁川を第八章に論じる。

そこで著者が強調するのはキリスト教的基盤として一方では神に没入しつつ、他方で自我を主張する梁川の思想であり、これを一層明確化するため対立的思想性をもつ井上哲次郎による不健全で病的で現実逃避の主観主義に過ぎないとする梁川批判を紹介して彼の世俗倫理を超越した宗教思想としての意義を述べる。

続く第九・十章では一転して、能動的に対社会的に強靱な行動をとった人物三人を取りあげる。国柱会の田中智学、社会改造に挺身し大逆事件で刑死した曹洞宗の内山愚堂、真宗大谷派の高木顕明である。勿論これまで個々の研究がなかったわけではないが、戦前を一方的に否定するイデオロギー的処理あるいは国家転覆の犯罪者というレッテルによる既成教団からのタブー視などによって、結論が先に見えた特定の思想性豊かな研究はあっても公平な研究のまな板に乗せることはあまりなかった。著者は最初に智学について、断固たる折伏主義と強烈な選民意識の現実化が政治的統一者としての天皇で転輪聖王、宗教的教化の任が日蓮主義だとする法国冥合論による日蓮主義的国家主義の展開を論じる。加えて国体論だけでなく葬式仏教から婚礼仏教への転換、東京新都市論など幅の広い智学像まで説明する点が印象的である。内山と高木については社会改良を視野に入れた新仏教同志会の基層的説明、社会主義者達との関係、仏教社会主義の帰結点としての両名の思想と大逆事件

の関係などを克明に叙述する。その手法は丁寧である。ただし柏木隆法の研究内容の活用については、それが特定の立場に立つものだけに一考し注意する必要があるだろう。

第十一章は岡倉天心である。岡倉と仏教との結節点を考えると、信仰とは別次元の美術関係からと思いがちであり、私もいささか唐突かつ違和感を覚え、なぜ岡倉なのかという疑問も無くはないが、著者の意図はそこにはない。『東洋の理想』『東洋の覚醒』などを駆使して「アジアは一つ」なる標語の意味を説き、縷々インドとの文化的同異の質を論ずるのは、要は「近代日本のアジア観」をうかがう手立てだろう。なぜなら、これも第二巻「IVアジアと関わる」で述べる近代日本仏教と海外の仏教、もつとはつきり言えば「近代仏教とアジア」という従来のにきわめて手薄な領域、というよりほとんど未開拓状況の研究領域に一石を投じメスを入れようとする際の基層部分を明確にしておこうとする著者の企図からと推測できる。加えて政治的海外進出の根拠も探ろうとする近代思想史上の関心もあると見てよい。ただしこれは勝手な憶測に過ぎない。間違ひの際は、平に御容赦を願う。

最終十二章では、明治から大正へと推移してゆく思想的展開を観察するときの懸け橋的意味を西田幾多郎の哲学的営みに求めて論じ、巻末に総まとめとして明治日本の思想的課題であった全体と個という二元論的矛盾の解決を西田

の場合に代表させ純粹經驗という一元論で調和水解して次代に送り、無の論理で次々に転換したと纏めている。

以上、駆け足で明治に入って仏教を独り立ちさせ、迷信的信仰を打破して知識レベルに上昇させた上で自己一人の内省面で解決しようとしたもの、国内的に社会改造という外面的解決に向かうもの、海外におけるアジア仏教との関係等、輪が次第に広がるような流れをもつて仏教思想で近代日本の思想を論じた本書を概観した。その結果、近代日本思想の中心位置に常に存在したのが仏教であったという著者の抱懐する思想的パラダイムが明確になった。そこで、全体を通して構成上の若干の疑問を提示してみたい。

第一に登場人物選定における妥当性の問題である。本書全十二章で十三人、みな思想的格闘をした人ばかりであり、井上哲次郎・村上专精・岡倉天心らも著者の意図からは認められよう。しかもこれらの人びとは豊富な知識を持つ仏教でもいわば上部構造の人ばかりである。しかし現実の仏教を支えた多くは、故池田英俊の研究を待つまでもなく各既成教団下部の教会結社活動の人びとである。もちろん多くの民衆は思想家ではない。では本書でも名前だけは出てくる大内青鸞・加藤咄堂・島田蕃根・高島米峰などに代表される居士仏教者の一群はどうだろうか。彼らは知識においても活動においても一端の仏教思想を持ち合わせていたことを忘れてはならないだろう。さらに明治・大正・昭和

の三時代にわたる思想的格闘と変遷という視座で言えば、たとえば個の徹底的放擲から幸徳秋水や平民社に接近し反転して神道に落ち着いた無我愛運動の伊藤証信などは、個の徹底的内面化は同時に必然的に全体に同化埋没してゆく宿命だと主張する著者の論をまさに実証する典型的な仏教思想家と言つてよい。その他にも若くして没したので話題にならないが新仏教同志会の古河勇などの論も面白い側面があるように感じる。これらの人物の中からも選定は充分可能であるというより選ぶべきであった。また、仏教という枠外かもしれないが思想内容は仏教そのものでもあつた明治以後の石門心学者たちの制度史的苦闘、思想的苦悶の動向を観察したとき、今後は枠を広げてこのような人びとも扱つてほしいと思うことしきりである。なぜなら、本書の十三人中、島地はさておき、綱島・田中・内山・高木を除く八名はまさに帝大アカデミズムの超エリートの人たちばかりである。彼らが思想界の頂点に位置したことは言うまでもないが、苦闘苦悶は彼らだけでは決してなかつたからである。

もう一つは、課題キーワードである〈国家と個人〉〈全体と個〉については、いずれも個我への主張は日清・日露前後またそれ以後に集中していることである。つまり時代閉塞感をただよわせ始めた個へのこだわりと傾斜の現象を大正期の中心思潮とすれば、反対に強力な全体への主張とこ

だわりの思潮は維新以後の明治の一大特徴と言える。とすれば思想史、精神史の区切りで見れば明治はせいぜい引張つても日露戦役あたりまでであつて、それ以後の個への苦悶のいとなみは、もはやすでに大正期に入つていて大正プロローグ、大正精神史と言つてもよいのではないだろうか。ともかく、読み込めば読み込むほどガイステス・レーベンの面白さを満足させてくれるのが本書第一巻である。

## II

第二巻『近代日本と仏教』も第一巻と同じ問題意識をもつて編まれたもので、第一巻が各思想家の思想史的位置づけ作業であるのに対して、これはさまざまな機会に発表した論文やエッセーを纏めたもので配列的には必ずしも一貫性があるとはいえないが、それだけに各篇ごとに纏められた個々の内容は著者の関心が那邊にあるかを推知する格好の材料を提供すると共に、実は第一巻での主張を補足補完する役割をもっている。内容は大別四部門より成る。第一部の「近代思想と仏教」では、近代日本における個の問題解決について仏教のはたした役割を諸角度から眺めた四論文を収める。第二部の「解釈の地平」では近代いな近年の研究や思想家の伝統的思想としての仏教に対する解釈および位置づけについて仏教研究方法論史の側面から和辻・丸

山・山折の三人に代表させたかたちで論じ、続く第三部「仏教研究の批判的視座」では最近の問題として批判仏教論に關して四論文をもつて言及し、最後に第一巻でも指摘する日本という一地域を越え、中国を中心とするアジア全体を睥睨する視座から「アジアと関わる」と題して四論文を置いて語る。以下紙幅の関係で第一巻との重複は避け特徴的箇所だけを見てみる。

第一部「日本の近代はなぜ仏教を必要としたか」「内への沈潜は他者へ向かうか」においては第一巻で登場した人物達を概観し、近代日本の思想を読み解くキーポイントは個の自覚のあとの内か外かへの解消如何によるが、それは当代のなかにすでに胚胎するという同時進行的思想だと主張し、その個の落ち着く先について東洋の伝統思想と西洋哲学を止揚してあらたな地平を模索する典型例として「京都学派と仏教」と題する論文を置き、西田・田辺・西谷三学者の思想的苦闘史を日本思想史のなかで位置づけるべきと強調する。このいとなみの系譜は現在も承継されていると思うが、それは同時に東に対する京都大学の思想的挑戦と捉えるのは大誤謬であろうか。ついで母性的許しをイメージする阿闍世コンプレックス論に關する一文を置く。おそらく日本人の精神構造を読み解く一つの鍵として掲げたものと推測するが、それまでの論調が途切れた感を受け正直言って唐突に感じる。

第二部に入って、宗教的感性をもった把握法を否定しあくまで高度な哲学的認識論として理解した和辻哲郎の原始仏教論の解釈的特徴を論じ、批判も多々あるが近代的研究の先駆として影響を与えたとしてその功罪を指摘する。次いで丸山真男の『講義録』第四冊に収録する丸山思想史における仏教論の位置づけを古代仏教と鎌倉仏教を通して概説し、今日的意義を提示できる丸山仏教思想評価を評価している。丸山についてはこれまで扱ったことがないので、私には喋喋する資格はまったくない。本書を通じて勉強させていただいたが、あの顕密体制論への把握を「屈折と妥協」図式で理解するかぎり丸山が先駆的であったとは不勉強の極みを恥じる以外にない。ただ異端と主流の弁証法的進化という把握構図は共感する部分が多い。加えてもう一人『悪と往生』を通して著者は山折親鸞論を論断する。それは丸山評価とは対照的である。丸山の場合は鎌倉祖師の世界宗教的普遍性のゆえの評価であったが、山折の場合は神道の要素を包含した日本型宗教伝統のなかで語るといふ魅力はあるものの、それはかえって日本人特有の差異なき同質性のなかに溶解してしまい、プロテスト的側面を見失い歪曲するとして、その危険性を指摘する。当然その流れは第三部でも明確に指摘するところとなつてゆく。

第三部は仏教研究方法論に関する成果と課題を纏めたもので、本書を購入した若き仏教研究学徒はおそらく最初に

この四本の論考を読むだろう。まず最初に据えた「仏教史を超えて」では仏教を基軸としてこれを取り巻く民俗学や神道史学、さらに日本思想史学など近年における興味ある研究視座を紹介し、続く「批判仏教の提起する問題」では近年学界でセンセーションを巻き起こしたいわゆる批判仏教の論点を簡潔に示し、今後の課題にも言及する。ただし批判者への一言も忘れていない。そして「日本における禅学の展開と展望」においては、今北洪川、釈宗演、鈴木大拙と続く系譜から西田幾多郎までの禅学研究史を鳥瞰する。それは特段目新しいものではないが、そのあとの最近のコンピュータ使用のテキストデータ作成、先述の批判仏教の両名による曹洞宗の思想と仏教学研究の両面批判、海外からの禅学研究紹介などは日本禅学関係研究史の人物と内容紹介というレファレンスの要素をもつだろう。次いで「アカデミズム仏教学の展開と問題点」では東京（帝国）大学を中心とした日本の近代仏教学研究の潮流と特徴、および問題点を大枠三期に分かつて最初の原坦山から中村元までの意義を述べ、加えて現在活躍中の同僚後輩の研究視座まで丁寧に紹介し説明する、いわば学科小史となっている。

最終第四部「アジアと関わる」は第一巻では岡倉天心の章で語られた部分で、中国仏教と日本仏教の関係を中心とした近代日本仏教と海外アジアとの関係に言及した論文四本より成る。第一論文「近代仏教とアジア」では、たとえ



ば陳継東など新進気鋭の若手中国人研究者による最新の研究動向などを紹介しつつ概観し、次いで第二論文「日中比較よりみた近代仏教」において中国と日本の双方における近代仏教の展開を論じ、近代化とはいっても異なる対応の仕方であった点をその欧米思想受容の相違に求めている。これは近代アジア論を語るときの基本的な重要事項であると思料するのであえて復唱すると、日中双方の近代西洋思想（哲学）受容と各伝統思想との衝突格闘と深化の結果の相違に基因する。日本の場合はドイツ観念論から実存主義まで受容しプラグマティズムは受け容れなかった。その反映として明治思想史が語れるが、近代中国の場合は日本とは逆で、パース、ジェームス、デューイの主張するプラグマティズムを受容してしまったのである。これが単に思想史レベルにとどまらず政治経済に反映現出している現実を直視するとき、精神的基層形成要素の相違があり、同じ土俵で語ることはできない事情を明確に認識しておくことは重要である。それにしても著者の願うとおり、早く当該領域における日本人研究者を得たいものである。そして第三論文「日本侵略下の中国仏教」では具体的に太虚を中心とする近代中国仏教界の人物の活動を日本との関係において論じ、最後に据える第四論文「大川周明と日本のアジア主義」においては、近代日本のアジアへの対応観を脱亜と興亜で示す竹内好の論を手がかりにして大川周明のアジア論

の理想と挫折を論じ、末尾で一般にアジアといわれる地理的概念、文化の多元的差異などの問題を指摘しつつ連帯の将来的可能性への模索を強調して筆を擱いている。

以上、第一巻と第二巻の内容を簡明に約せば、近代思想における中心存在は仏教思想であったとする著者の主張を証明するために個人の精神的足跡を取り上げたのが第一巻であり、時間的近代と地理的アジアという時空両面から扱われてきた近代仏教研究史の実績紹介と今後の課題提示が第二巻であった。ただ第二巻にかぎって言えば、研究史紹介の紹介論評は困難である。また両書を書く著者の基軸思想は〈近代思想の中心は仏教思想であった〉と言ってよいが、その場合の仏教思想とは伝統思想とはいってもいわゆる教団もしくは庶民が抱懐していた仏教思想というより当該思想家による心のなかの仏教思想（伝統思想）ではなかったのか。だとすれば、その差異は明確に示されなくてはならないだろう。

しかし著者が「伝統思想の研究者は、その専門のタコツボの中から出ることができず、時代とは無縁の楽園で充足していた。そこからどう出て行くことができるのか、それが問われなければならない。」と喝破するかぎり、そのとおりという以外になく、猛省すべき点が多い。と同時に、第二巻は新進の研究者にとつて今後研究すべき内容を豊富に提供してくれる意味において貴重であり、これほど便利か

つ有益な指南書はないだろう。冒頭でも述べたとおり、二冊併せて〈研究意欲をくすぐり高めるきわめて刺激的な手引書〉と言う所以は、この点に存するのである。